

平成31年度第1回 広島市教員等育成に関する協議会議事要旨

1 開催日時

令和元年6月28日（金） 10:00～11:30

2 開催場所

広島市役所本庁舎 14階 第7会議室

3 出席者

(1) 大学関係者・学校関係者・教育委員会

井口 あずさ	(比治山大学 言語文化学科 日本語文化コース 准教授)
石原 義文	(広島文教大学 教職センター長)
小山 正孝	(広島大学 大学院 教育学研究科長)
神野 正喜	(広島女学院大学 人間生活学部 児童教育学科 教授)
高西 実	(広島文化学園大学 学芸学部 子ども学科 准教授)
立上 良典	(広島工業大学 教職課程センター長)
田中 宏幸	(安田女子大学 日本文学科 教授 教職センター長)
胤森 裕暢	(広島経済大学 経済学部 教授)
土屋 英男	(広島国際学院大学 工学部 教授)
鶴田 一郎	(広島国際大学 教職教室 准教授)
西森 章子	(広島修道大学 人文学部 教育学科 准教授)
福原 之織	(エリザベト音楽大学 教養・教職主事 音楽文化学科 教授)
佛圓 弘修	(広島都市学園大学 子ども教育学部長補佐)
向居 暁	(県立広島大学 人間文化学部 国際文化学科 教授)
南 直子	(広島市立幼稚園長会 代表(基町幼稚園長))
島本 靖	(広島市小学校長会 代表(段原小学校長))
三浦 義之	(広島市公立中学校長会 代表(国泰寺中学校長))
田中 伸二	(広島市立高等学校長会 代表(美鈴が丘高等学校長))
荒瀬 尚美	【座長】(教育委員会事務局 教育次長(事)総務部長)
森川 伸江	(教育委員会事務局 学校教育部長)
野間 泰臣	(教育委員会事務局 学校教育部 指導担当部長)
松浦 幸雄	(教育センター 所長)
ト部 匡司	(欠席)(広島市立大学 国際学部 准教授)
中尾 秀行	(欠席)(広島市立広島特別支援学校長)

(2) 事務局

教育企画課長、教職員課長、健康教育課長、指導第一課長、指導第二課長、特別支援教育課長、生徒指導課長、教育センター次長

4 意見聴取及び協議（公開）

- (1) 「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」の重点化について
- (2) 「ひろしま未来教師セミナー」について
- (3) 教育現場における人材確保策について
- (4) その他

5 傍聴人の人数

0名

6 資料

- (1) 資料1 教員としての資質の向上に関する指標の重点化について
- (2) 資料2 平成31年度ひろしま未来教師セミナーについて
- (3) 資料3 教員採用選考試験実施状況
- (4) 資料4 各大学からの質問等について

7 議事内容（要旨のみ）

【○：構成員（大学関係者・学校関係者） ●：構成員（教育委員会・事務局職員）】

- 本会議の目的は、大学、学校、教育委員会の関係者が一堂に会し、教員の育成に係る課題や教員に求める資質能力等について、意見交換を行うとともに、会議で出された意見を踏まえながら、より効果的に教育施策を展開し、本市教員の資質向上を目指すものである。本日は、3つの議題について意見交換を行うこととする。

(1) 「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」の重点化について

資料1に基づき、事務局が説明。出席者の主な発言は以下のとおり。

- 自己評価の実施者は全ての校種なのか。校種別の特徴などはあるのか。また、指標の38と39は数値が低い、それはどのように捉えるのか。

- 校種により対象者数が大きく違うが、平成30年度の傾向をお伝えする。

幼稚園は、他の校種と比べて自己評価が低い傾向にある。これはテストがなかったり、目の前の子どもの状況に合わせて随時保育を展開したりすることから、「できた」ということが自分で分かりにくいのではないと思われる。

小学校は、他の校種と比べて初任の時から3年次までの伸びが大きい特徴がある。小学校は担任として全ての教科を指導しているため、校内で授業について聞いたり見たりすることが、教科にかかわらず学ぶ機会になっているからではないかと考えられる。

中学校・高等学校は、初任の段階の数値は高いが、3年次では小学校とほぼ同じ数値になり、伸び幅が小さい傾向がある。教科担任制であることから、小学校と比べると担当教科の授業を見る機会が少ないことが、小学校と違う結果に影響しているのではないと思われる。

特別支援学校は、伸び幅が他の校種に比べて一番大きい。特別支援学校では複数で担任することが多く、常に同僚の仕事を見て学べることから自身の改善につながっているのではないと思われる。

38、39の「チーム学校」づくりの項目には「全体に貢献できる」ことや「全体を俯瞰する」という内容が入っている。年数にかかわらずそれぞれの立場で、学校の中で果たす役割があるということを意識してほしいという思いで若手前期から指標に位置づけている。しかし、若手の段階から「全体を俯瞰」し「全体に貢献」していると感じることは難しいと考える。この段階ではこの点を重点とするよりも、生徒指導や授業づくりに集中した方がより効果的と考えて、（前述の）5つに絞った。

- 実際の自己評価を生かしていくというのが、市の実態に応じた研修のあり方を考える上でよい。また、初任であっても自分が学校の中でどういう役割を果たすのか自覚しなければならないが、恐らく最初は自分一人で精一杯だろうというのも納得できる。

(2) 「ひろしま未来教師セミナー」について

資料2に基づき、事務局が説明し、各大学から事前に質問があった項目（資料4）について回答。出席者の主な発言は以下のとおり。

- 未来教師セミナーと併せて、大学生による学校での支援活動も行っている。志ある一年生にはそちらも積極的に参加していただきたい。

- 未来教師セミナーは、学生たちから非常に学ぶことが多かったと聞いている。一方、学校支援活動に参加した学生からは、実際には事務的な手伝いで終始してしまい、子どもとの関わりがなかったという報告もある。学生たちの教員に対する意識を高めるという面で、より効果的なものとするためには、支援活動の内容について議論を要するのではないか。

- 本学では、学校支援活動への参加を積極的に勧めているが、受け入れの学校に迷惑を掛けないように、一年次の成績を基に、ある程度の基準に達した二年次からの学生としている。しかしながら、二年次の学生を対象とする未来教師セミナーの時期と重なってしまうため、どの段階で支援活動に参加するのがよいのか説明がしづらくなっている。実際、二年次で学校支援活動に参加しようとする意欲のある学生は、一年次から参加可能な広島県教師養成塾へ参加している。
 - 基準を設けながら学生を学校現場に出すという配慮はありがたい。学校支援活動には様々な課題があるが、それでも学生たちは早い段階で現場を見るべきだと思う。未来教師セミナーも学校支援活動も、重要なのは学生が何を望んでいるのか、その思いを吸い上げることである。学生のニーズに合うような形ができれば、学生にとって、教員の魅力ややりがい気づく良い経験になるのではないかな。
 - 学校支援活動後のフィードバックを、受入先の学校に十分にできていないように思う。今後は、学校支援活動後に学生たちから提出させた報告書を受入先の学校側と共有するなど、大学と学校との対話を増やすことを考えていく必要があるように思う。
 - 本学の場合は、近くの小学校の校長先生が、支援活動に参加するに当たり、事前に学生の要望を聞いてくれ、学生の中では「45分まとまった授業を見たい」といった意見が最も多い。大学関係者も時折授業に参加、研究をさせてもらっているが、現場の先生も緊張感を持って授業をすることになり、お互いにとって良い意味でのWin-Winの関係性ができ、効果が上がっていると感じる。
- (3) 教育現場における人材確保策について
- 資料3に基づき事務局が説明し、各大学から事前に質問があった項目（資料4）について回答。出席者の主な発言は以下のとおり。
- 全国的に教員のなり手がなく、志願倍率も低下している中で、教職はやはり魅力があるということをどう発信すればよいか、志のある学生に教員を目指してもらうにはどうしたらよいか等、ご意見をいただきたい。
 - 未来教師セミナーや若手教員の研修を受講することにより、今後期待される主体的・対話的で深い学びを指導できる力をしっかりと付けられるという見通しが立っていれば、就職を目前にした学生も、意欲的に採用試験に申し込むのではないかな。
 - 教育実習を経ると学生の意識が随分と変わる。現場を経験することで、より具体的に教員になるイメージを持てるのが大きい。そのため、未来教師セミナーに1年生から参加できるようになればありがたい。また、研究指定校などの実際の研究会に参加する等、現場を学生が見る機会が一層広がるとありがたい。それが、教師を目指す学生の数の増加、質の高い学生が教師を目指すということにつながるのではないかな。
 - 一人の人間が成長していく中で、人間としての資質を積み重ねていくというキャリア教育の視点が必要になるのではないかな。また、もっと気軽に学生と学校現場が関われるような環境になればよい。学校現場、社会全体としてそういうシステムができたらよいと思う。
 - 学生の、学校に育ててもらったという感謝の気持ちに心打たれることがある。彼らの強い思いを、今度は学校現場に返していけるよう、今回示された指導の重点化について、大学内で共有していきたい。
 - 大学は、キャリア教育的な視点からも学生の成長を促していくという筋道を立てていかなければいけない。セミナーや学校支援活動の様々な経験が教員採用試験に

臨むという気持ちを高められるのではないかと思います。また、大学教員が未来教師セミナーの講座に参加し、学生と一緒に学ぶ機会をもらうことはできないか。

- 大学教員の方々にもセミナーや研修に参加していただいて構わない。
- 講師を経験しながら正採用を目指す人たちのケアも必要ではないか。4・5月をどのように乗り越えるかというところが強く感じる。特に、臨時的任用教諭や講師は正採用と同じような仕事をしながらも初任者研修もなく、指導に悩んでいる者もいる。
- 本市では臨時的任用者に対する研修会を今の時期に行っている。今後、開催時期も検討したい。
- 教育センターでは、対象者全員が受講する研修として「臨時的任用教諭研修」を行っている。また、任用が決まった者については希望者を対象に「採用前研修」を実施している。臨時的任用者は出身校の先生に相談していると聞くため、卒業生の声などを届けていただければ、今後の改善に生かしたい。(教育センター案内 11～12 ページ参照)
また、初任者には指導教員が措置され、臨時的任用者には措置がないが、学校によっては可能な範囲で臨時的任用教諭も一緒に指導するなどの工夫をされているところもあるようである。
- 本学に入学する学生は、教職に就きたいという意志が強いが、最近のマスコミの影響で、「教員はきつい仕事ですか」と質問する学生が出てきた。確かに日本の先生は非常にたくさん働いていることは事実であるため、その改革はしっかりする必要があるが、学生の教員になりたいという気持ちが強ければ、教員になると思う。本学としては、教員になりたいという学生を受け入れて、4年間その志を貫かせたいと思っている。
- 本市では教員の働き方改革推進プランを策定し、今年度から取組みを進めているところである。大学においても、学生に、少しずつは改善されていくということを説明してほしい。

(4) その他

資料4のその他について、事務局から説明（意見等はなし。）。